日本体育協会公認アスレティックトレーナーにおけるトレーナー活動の実態と活動経過年数に応じて身につけるべき能力要素についての一考察

～東北・北海道地域での登録者の傾向に着目して～

青島　大輔　　仲野　隆士

キーワード：JASA-AT、活動状況、社会人基礎力、職域、キャリア

A study of current situation of JASA athletic trainer's activities in Japan and required skills depending on years of experience. Focused on the trend of Tohoku and Hokkaido registrants.

Daisuke AOSHIMA　　Takashi NAKANO

Abstract

The purpose of this study was to examine JASA athletic trainer's activities in Japan and required skills according to the years of experience.
The results were summarized as follows.
The activities of JASA-ATs in Tohoku and Hokkaido areas are confirmed. It is still in the difficult situation for JASA-ATs to obtain the job. However, only few of them are employed.
"Strengths" of JASA-AT are having a connection among each professionals and being specialized in a sport and training.
JASA-AT is recognized as a high-quality guaranteed certification in the field of athletic trainers. Especially, "athletic rehabilitation" is a specific skill for JASA-ATs and by showing its specialty and superiority, they can achieve differentiation from other AT-related certifications.
It is very important for less-experienced JASA-ATs to learn professional skills and knowledge first. It is indicated that acquisition of an organization management skill and a communication skill is emphasized as they get older and gather the experiences.
JASA-ATs with more than 15 years of experience should act to deepen the social connections. In particular, they are expected to lead JASA-AT in the best direction with changes in the system and structure.

Keywords: JASA-AT, activities, fundamental competencies for working people, occupational field, career

Ⅰ．研究の背景

1. JASA-AT資格の位置付けと制度

公益財団法人日本体育協会（以下「JASA」という）公認アスレティックトレーナー（以下「JASA-AT」という）は、JASA 及び加盟団体等が、公認スポーツ指導者制度に基づき資格認定する指導者資格の一つである。中でも、メディカル・コンディショニング資格として位置づけられ、スポーツドクター及びコーチとの緊密な協力のもとに、競技者の健康管理、傷害予防、スポーツ外傷・障害の救急処置、アスレティックリハビリテーション及びトレーニング、コンディショニングを担当する指導者とされている。

JASA-AT の養成は平成 6 年度より開始され、当初は JASA 加盟団体及びプロスポーツにおいて既にトレーナーとして活動している人々を対象とした特別講習会を実施し、これを受講した者に資格を付与していた。平成 8 年度以降は、講習内容が整備され正規の養成講習会が実施されている。また、講習・試験免除適応コース承認校（以下、「免除適応コース承認校」という）による養成も行われており、国内の大学・専門学校に対して規定のカリキュラム設置を指定している。JASA-AT の課程認定校は、大学 31 校、専門学校 36 校の計 67 校（2013 年 6 月）となっている。現在、JASA-AT は、JASA-AT 検定試験の合格を持って認定されている。この検定試験を受験するためには、養成講習会を受講修了するか、免除適応コース承認校で規定のカリキュラムを修了しなければならない。

しかしながら、養成講習会は誰でも受講できるというものではなく、受講にあたっては都道府県体育協会、中央競技団体からの推薦がなければ受講はできない。養成講習会の受講者選考の過程は、現場でのトレーナーとしての活動経験の有無が問われる。これは、経験によって「能力」があると見込まれる人に対して、能力は担保した上で、知識と技術の担保を資格によって与える事をねらいとしているためである。一方、免除適応コース承認校は、所定のカリキュラム設置をしている大学・専門学校においてカリキュラムを修了した後に受験資格を得る事ができるが、JASA-AT として身につけるべきトレーナー活動経験の不足が危惧される事から、最低 180 時間の現場実習を修了しなければ、検定試験の内、実技試験を受験する事ができない。また、JASA-AT 検定試験の合格者数は、養成講習会および免除適応コース承認校の受験者を合わせても、わずかに年間 200 名前後である。これは、類似する民間のトレーナー資格である NPO 法人日本トレーニング指導者協会（JATI）認定トレーニング指導者（JATI-ATI）が年間に 1,000 名程度の合格者を認定していること、また医療類似資格の年間の合格者数（鍼灸師、柔道整復師が平均して 4,000 名程度、理学療法士、10,000 名程度）と比較しても、JASA-AT の合格者数が極めて少ないことがわかる。これは、試験での合格難易度が高く設定されている事が理由とされており、資格の取得難易度を高くする事で、JASA-AT の品質を一定基準に保証する役割を果たしている。こうした経緯から JASA-AT は、数あるトレーナー資格の中でもシンボルとして表現されることが多い。

2. トレーナーの経験年数及び、実績の積み重ねに伴って身につけるべき能力の違いと必要性

公認スポーツ指導者制度の下に認定される公認スポーツ指導者資格は、スポーツ指導者として最低限身につけなければならない技術や知識について一定の基準を示すものであり、資格を取得することによって確保される権利や、特別な技術を規定するものではない。さらにいえば、資格取得によって職が確保され、世の中とどのように関わ

るのかを規定したものでもない。しかし、トレーナーはその専門性の高さと、トレーナーとしての雇用や、実際にトレーナーによる起業がなされている事から、「職業として発展」することが強く望まれている。中でもJASA-ATは、JASAが認定する唯一の公認資格（公認スポーツ指導者資格）であることから、JASAが管轄する競技団体でのトレーナー活動が期待され、資格取得を志す者も多い。JASA-ATを取得する事と同時に、雇用や職域の確保につながる何らかの好影響を期待する声があり、この事が資格の認知普及につながっている。

JASA-AT取得のためのカリキュラムは、当然ながらJASA-ATとしての知識と技量を確認するための専門的な内容によって構成されている。カリキュラムを元に専門科目テキストが発行されており、資格制度の整備される歴史的な背景や諸外国の事情ならびに、JASA-ATと医療資格との認識の違いについて述べられている。同テキストでは、JASA-ATの役割を7つの項目として示しており、さらにその役割を果たすために必要な技術と知識について専門的な範囲で学習する事を示している。これに加えてJASAでは、JASA-ATに必要な能力に「ヒューマンスキル」の重要性も示している。JASA-ATが人を対象として働きかけをする仕事であるがゆえに、持つべきコミュニケーション能力やコーディネート能力を重要視しており、積極的に身につけることの重要性を示している。JASA-ATが専門性の高さを活かして社会に貢献し、他の類似する資格との間に相対的に高い価値を示していくためには、こうした「専門以外の領域における能力」においてもさらに向上させていくことが必要になるだろう。

経営学の領域ではKatz（1974）が、会社組織の管理者に必要なスキルとして、テクニカル・スキル（Technical skill）、ヒューマン・スキル（Human skill）、コンセプチュアル・スキル（Conceptual skill）の3つのスキルから構成されるモデルを提唱している。katzによると、管理者は時間的推移と関連して上記のスキルの重要性か変化する事を示している。トレーナーにおいても、時間の経過と実績の積み上げに伴ってその立ち位置が変化することから、同じように世代ごとに求められる能力要素の違いが想像できる。

Ⅱ．先行研究と問題の所在

JASA-AT取得後の活動の様子については、日本体育協会公認アスレティックトレーナー連絡会議が発表した、JASA-ATマスタープラン（2010）がある。この研究は、JASA-AT資格取得者を対象としてトレーナーの活動先や就業の形態そして、JASA-ATを取り巻く社会環境の現状を把握するとともに、現状から見える「強み」と「弱み」を抽出し、その中から将来の方向性を探り「ミッション」と「ビジョン」を設定し、それらを実現させるための具体的な目標を示すものとして発表され、平成32年（2020年）までの活動方針を示している。また、馬場（2011）は、JASA-ATが社会環境の実情に合わせた認知、普及を進める糸口に、資格の品質を担保するための制度化の重要性を示唆している。これは、JASA-ATが有資格者としての権益を守り、利害関係者の利害を相互に調整するような制度を制定し、関係者と契約関係を結ぶことの重要性を示している。いずれの先行研究においても、JASA-ATの有資格者を取り巻く社会認識の低さとそれを前提としてJASA-AT自身が、これから取り組んでいくべき要素・方向性を示している。しかし、それは大きな「制度」としての方向性を示すものや、「トレーナー業界」として取り組むべき方向性について示されたものであるため、一人一人のJASA-ATが取り組むべき具体的なアク

ションプランが示されたわけではない。

そこで、本研究では、スポーツ指導者資格の中でも特に職業との関わりが深い、JASA-AT 有資格者に質問紙調査を実施し、資格取得に至るまでの動機や背景、そして取得後のライフスタイルの変化について調査する事とした。また、調査の視点として経済産業省が示す「社会人基礎力 3 つの能力（12 の能力要素）」（2006）にも照らし合わせ、社会人として求められる要素からも情報を整理した。

本研究では、こうした観点から JASA-AT が高めていくべき「専門的な能力」と「専門以外の能力」について、それらを「優先して身につけていくべき年代」と照らし合わせながら、トレーナーとしてのキャリアの形成に有益となる情報を整理することを目指した。

今回は、東北・北海道に所在地登録をしている JASA-AT に協力をあおぎ、自身のトレーナー活動歴を振り返る機会を設け、またこれから先の将来におけるトレーナーとしてのキャリア形成を想像しながらそれぞれの所感について回答を得た。ここでは、トレーナーの活動を開始してからの経過年数を 5 年未満、5 年以上 10 年未満、10 年以上 15 年未満、15 年以上の 4 カテゴリーに分類した。質問項目を作成するにあたり、先の katz（1974）が提唱した 3 つのスキル要素に照らし合わせて分類した。また、その中でもテクニカル・スキル要素を「専門的な能力要素」に分類した上で、質問項目は、JASA-AT テキストに記載されている JASA-AT の役割を参考とし、ヒューマン・スキル要素ならびに、コンセプチュアル・スキル要素を「専門以外の能力要素」に分類した。

Ⅲ．目　的

・調査 1

JASA-AT を対象にトレーナー活動の現状把握と、そこから見える社会における JASA-AT の「職業としての必要性」について JASA-AT 自身の認識からその傾向について情報を整理する。

・調査 2

JASA-AT が、経験年数および実績を重ねていく上で必要な「専門的な能力要素」と「専門以外の能力要素」について習得すべき時期の優先順位とその内容について明らかにする。

Ⅳ．方　法

本研究のデータを収集するために、東北・北海道地域を所在地として協会登録をしている JASA-AT139 名のうち、本研究の趣旨に同意を示した 81 名の JASA-AT に対して、質問紙による調査を実施した。調査の詳細は以下の通りである。

1. 調査期間：

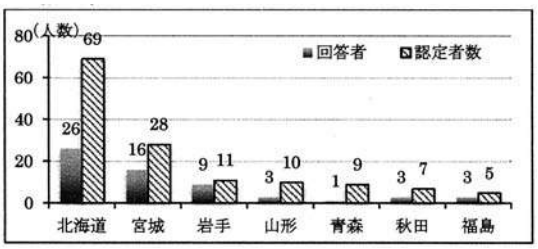
平成25年12月 1 日～平成26年3月31日

2. 調査方法：

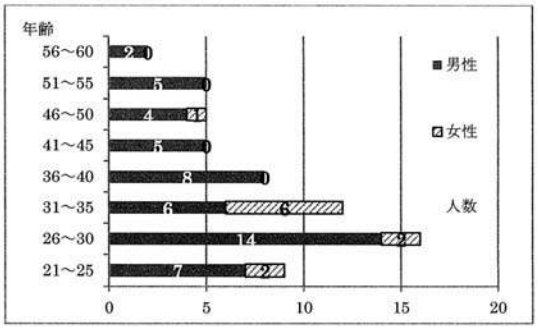
郵送法を用いて配布・回収

回収率 62 件（回収率 76.5%）

Ⅴ．結　果



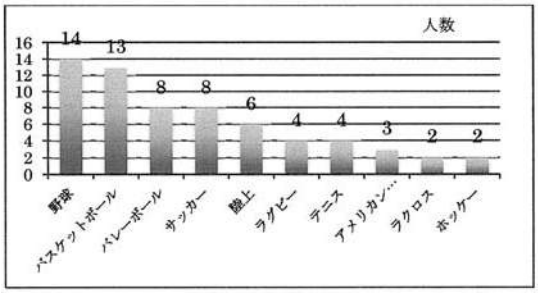
1)図 1　各県の回答者数と認定者数



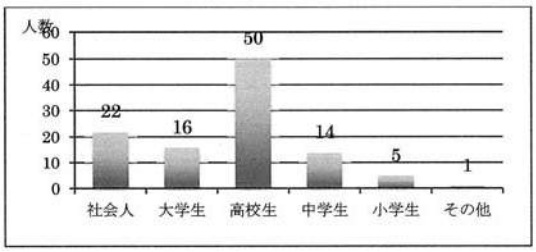
2)図 2 男女比率

男性 82.3%　51 人　女性 17.7%　11 人

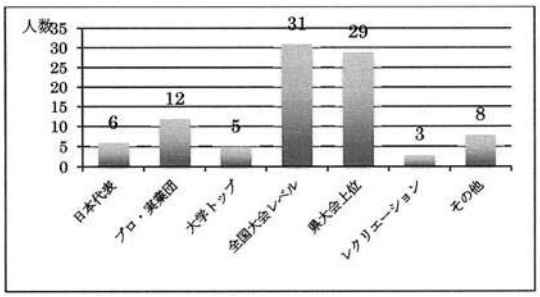
3)現在の年齢(n=62)
　平均年齢 35 才　最高 58 才　最少 23 才
4)現在のトレーナー活動実施の有無(n=58)
・活動をしている　49 名（84.5%）
・活動していない　9 名　（15.5%）
5)JASA-AT 取得の経緯（n=62）
・養成講習会の受講修了者 30 名
・適応コース承認校卒業者 32 名
6)トレーナーとして現在までの活動年数
　(JASA-AT 取得以前も含む)
　平均年数 11 年　最長 30 年　最短 1 年
　この内、JASA-AT 取得までの研修期
　平均年数3年　最長11年6ヶ月　最短 1 年
7)JASA-AT 取得時の年齢
　平均年齢 28 才　最高 53 才　最少 21 才



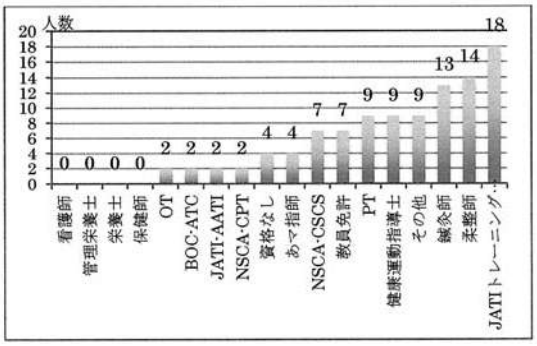
8)図 3 トレーナーとして活動した競技・種目（上位 10 種目・複数回答）



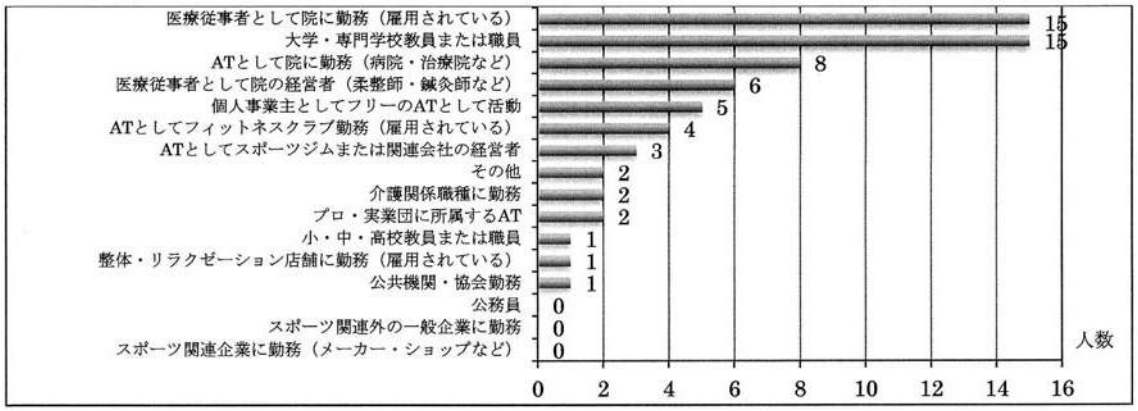
9)図 4 対象とする競技者の年齢層（複数回答）



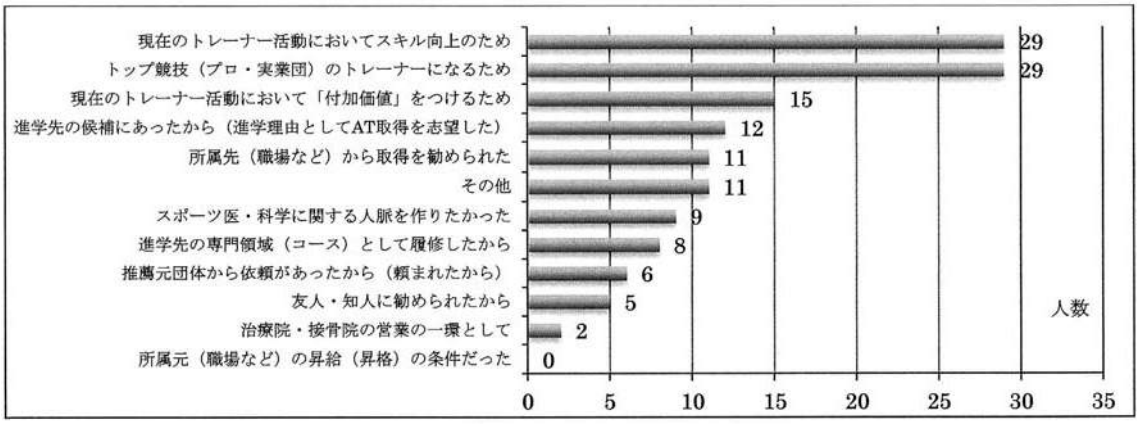
10)図 5 対象とする競技者のレベル（複数回答）



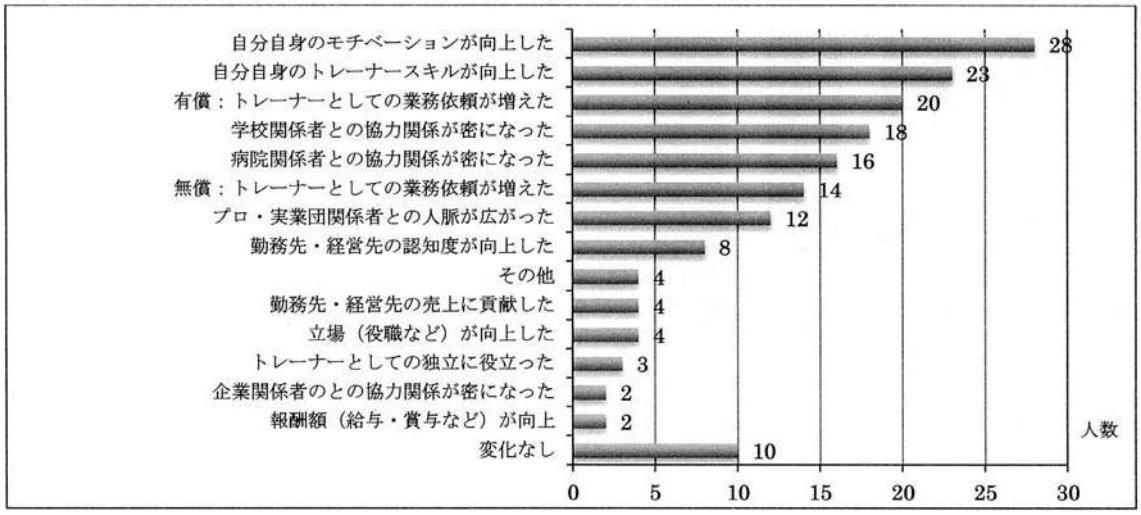
11)図 6 JASA-AT 以外に保持している取得資格（複数回答）



12)図 7 現在の主たる職業（複数回答）



13)図 8 JASA-AT を志した動機(複数回答)



14)図 9 JASA-AT 取得後の変化(複数回答)

15)AT と「仕事」の直接的な結びつきについて

表 1　資格取得後に予想と反して苦労した事（自由回答）

- AT の仕事があると思い、取得したが実際はそうではなかったこと（24 歳男性）
- AT の資格のみでお金を稼ぐことの難しさ。現場の料金設定に関して(27 歳女性)
- 地方に AT のコミュニティが少なく、トレーナー同士の繋がりが作りにくい（28 歳男性）
- （市民・地域からの）資格の認知度が低く、特に職域も確保できるわけでもないこと。各自、トレーナーそれぞれが努力して職業として成り立つよう活動しているが、協会などが組織化して職業確保はしてくれないので苦労している (35 歳男性)
- 日体協 AT を取得したとしても、それがすぐ仕事の依頼に結びつくわけではなく、自分の足を使い認知度を上げ仕事をいただいたこと。(46 歳男性)

表 2　トレーナーが果たすべき社会的責任（自由回答）

- 医療資格がなく、いわゆる医療(治療)行為を行った際のミスにより、何らかの障害を選手がこうむった場合、カバーする保険がない。マッサージをしてはいけないが、どこまでがマッサージという手技なのか明確ではないので選手側がマッサージだと認識していた場合にトラブルがあった場合は問題となる。(46 歳男性)
- 立場的に（女性なので）男性の方よりも問題になることは少ないですが、何かの補償制度があると、もっとおもいきった活動ができる方もいると考える。(34 歳女性)
- 活動時の保険の問題（39 歳男性）
- 保険、補償制度を整備しないといけないと思う（41 歳男性）
- 私たちの（JASA-AT の）身を守る保険がないこと（47 歳男性）
- トレーナーとして勤めている(チーム、団体に所属している)方の HP による情報掲載(写真、他者が写り込む活動風景等)に対して、不安を感じている。 Facebook や個人のブログに載っている記事を見ると時々「大丈夫だろうか？」と考えることがある。(31 歳女性)

表３　AT 自身が指摘する「資格取得者の課題」（自由回答）

・公認 AT 発足当時に取得の方々が、本当に現在のプログラムに対応した人材なのかが疑問。失礼なのは承知の上で、アスリハを実はよくわかっていない、CPR ができない、トレーニングが指導できないといった方々が本当に 「公認 AT」 と名乗っていいのか？法令ではないが、社会的責任としてこう思う（31 歳女性）
・医療現場を活動の背景にしている JASA-AT の方々は、JASA-AT としての大切な能力である「トレーニング」に対してもっと責任をもつべきだと思う。それを横において、治療に近い行為だけで JASA-AT の品質や仕事の事を述べている時点で、そもそも論点が違うのでは？（36 歳男性）
・収入のレベルや価値観が低い AT が多い事。（45 歳男性）
・他力本願ではなく、JASA-AT 自身が自分たちで「仕事を創る」意欲と、お互いのネットワークによる仕事のシェアを進めていくべきだと思う（36 歳男性）
・未だに社会的に認知度が低い。トレーナー＝治療家のイメージが高すぎる（49 歳男性）

表４　「JASA-AT だからできる事」強み・能力（自由回答）

・子供から高齢者、愛好家や部活動・トッププロなど、あらゆるレベルにおいて「身体運動」として共通の医科学があると思う。AT はあらゆる障害に対しての　処置ではなく、未然に防ぐ「予防医学」という面で強みがあると思う。（27 歳男性）
・スポーツ現場で動ける知識と能力。選手の一番近くでコンディショニングサポートできる能力（27 歳女性）
・スポーツに特化した知識を有し、選手個人や競技団体に働きかけを行う上で自分を認知されやすい。（58 歳男性）
・PT や柔整よりもトレーニングが指導できる。（39 歳男性）
・アスレティックリハビリテーションによる競技復帰と障害予防。スポーツ現場で選手の動きを見てこそできるケア。指導者と違う立場から選手に対する人間的指導（45 歳男性）
・アスレティックリハビリテーション実施能力と競技復帰手助け（45 歳男性）
・公認スポーツドクターとの話（相互理解）ができること（55 歳男性）
・講演や講師依頼の際は公的機関公認のため、依頼は来やすいし、頼む側も安心という反応（41 歳男性）
・一定の知識と技術を持っている証なので AT 同士を紹介しやすい。同じ仕事場でも一定の知識レベルでの話ができる（23 歳男性）

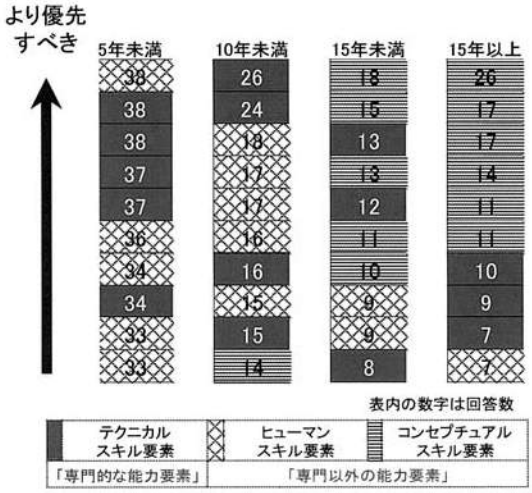


図 10 JASA-AT 年代別「優先して身につけるべき」能力要素（回答数の多いもの上位 10 項目）

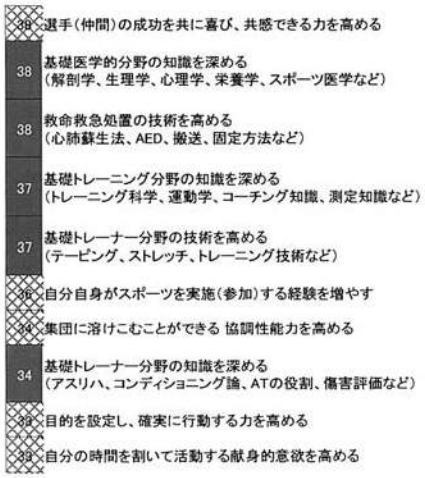


図 11 トレーナー活動を開始して５年未満に優先して身につけるべき能力要素

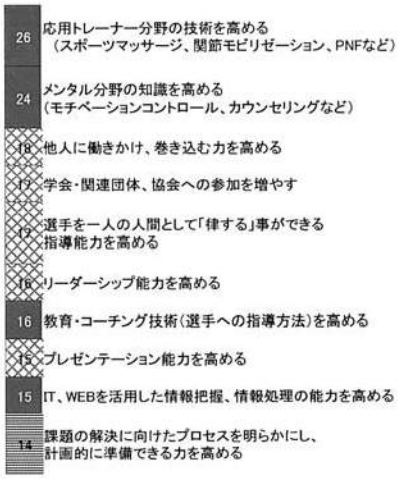


図 12 トレーナー活動を開始して 5 年以上 10 年未満に優先して身につけるべき能力要素

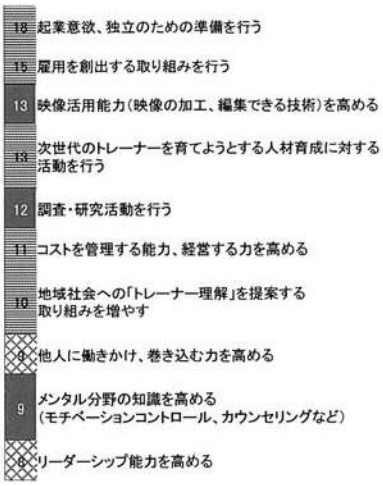


図 13 トレーナー活動を開始して 10 年以上 15 年未満に優先して身につけるべき能力要素

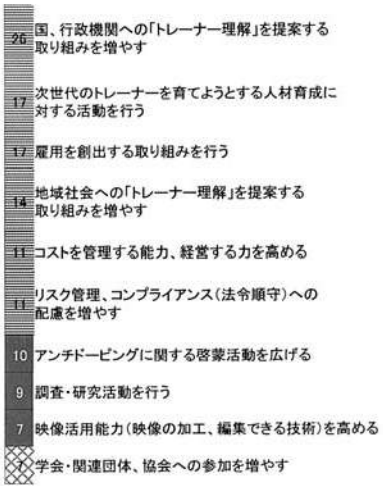


図 14 トレーナー活動を開始して 15 年以上に優先して身につけるべき能力要素

Ⅵ. 考　察

1. 東北・北海道地域におけるJASA-ATの活動

本調査によって、東北・北海道地域の JASA-AT らにおけるトレーナーとしての活動状況を確認することができた。先行研究と同様に、 JASA-AT 資格取得者というだけでは、「AT として主な職業を得る」のは、依然として難しい状況が存在している。しかし、わずかながら JASA-AT として「雇用される」、「独立」できる者もいることから、すべてを悲観するほどでもなく、JASA-AT を取得したことの強みを活かすことができれば、職業としての結びつきも強くなり、職域の拡大に期待がもてることが予想される。とりわけ、JASA-AT を取得したことによる「強み」とは、「広い（専門家同士の）人脈が手に入る」、「スポーツ（トレーニング）の専門家である事」、トレーナー業界の中では JASA-AT が「品質の保証された資格だと理解されている事」などがあげられる。中でも、「アスレティックリハビリテーション」はその専門性と優位性は高く、他の医療系資格との差別化が図れる能力として、ますます高めていくことが重要な要素だとわかった。さらに、「セラピスト（therapist）」ではなく、「トレーナー（trainer）」であることを強調する上で、「トレーニング（training）」「パフォーマンス（performance）」に関する専門領域を強く打ち出すことが JASA-AT が資格の認知を深める上で外すことのできない要素であると同時に、資格取得をした後も自己研鑽に取り組むべき重要な事項であることを、JASA-AT 本人らが認識していることも明らかとなった（表 3,4）。

社会に対して JASA-AT が貢献できる範囲は、今後広く成長することが期待されている（表 5）。特に、予防医学の面においてより重要となり、子供からお年寄りまで、生涯

にわたる健康について運動を指導する立場から支えることが期待されている。JASA-AT の強みである「同じ知識レベルでの人脈ネットワーク」が活用されれば、スポーツドクターとの連携のもと、地域格差の是正にも貢献できることが期待される。JASA-AT 自身がこの「強み」を広く活用し、能力を「サービス」「商品」に変えていく事が今後ますます求められる。

2. JASA-ATが身につけるべき能力要素と習得時期

1) トレーナー活動を開始して 5 年未満の時期

「資格の認知に見合うだけの経験値とコミュニケーション能力を優先して高める時期」

トレーナー活動を開始して 5 年未満の時期は、トレーナーとしてだけでなく、社会人としても「駆け出し」の時代である。トレーナー活動に必要な専門的な知識と技術のさらなる習得が JASA-AT 資格取得後においてもより優先して身につけるべきだと示された(図 11)。これは、すでに品質を保証されている JASA-AT においては、違和感を感じる点であるが、資格取得の経緯においてすでに経験値の高いトレーナーが資格を取得できる「推薦制度」が併設されていることで、JASA-AT 同士の中に質的な能力と経験値のギャップが生じている現状が影響している。若い年代のトレーナーでかつ、適応コース承認校を修了して JASA-AT を取得したトレーナーらは自身の能力を相対的に低く感じており(表 5)、資格取得後もそれらを補完することが早急に必要になると考えている。特に、応用よりも基礎的な要素が重視され、また救命急処置などのスポーツ現場で緊急で、直接的に必要とされる具体的な技術の習得はより重要だと示された。さらに、20 才代という若い年代は、身体的に充実している時期であることから、年齢の若いトレーナーであるならば、トレーナー自身も日頃から「自らがスポーツ活動を実施（参加）」するべきだという視点も示された。

テクニカル・スキル要素が優先される中で、次いで優先されたのは、コミュニケーション能力を中心としたヒューマン・スキル要素の習得であった。トレーナーにとって、スポーツ現場で多くの人との良好な人間関係を築くことは、トレーナー活動自体の根幹を支えるものだと言える。特に、最も優先させるべき要素として「選手（仲間）の成功を共に喜び、共感できる力を高める」といった「トレーナーマインド」の重要性を多くの JASA-AT 自身が認識し、トレーナーのライフスタイルにおいて活動初期の若い年代にこそ、最も優先すべきだと示していることは大変貴重な回答となった。

表 5　期待値と実力のギャップに悩む年代: 自由回答

・（自分の予想よりも早い年代で資格を取得したことで）周りからの視線が、「JASA-AT 取得者」へと変わったので、自分自身のスキル、経験の低さで悩む時期があった。（23 歳男性）
・周囲からの期待値が、予想よりも高く、活動にプレッシャーを感じている。（24 歳男性）
・JASA-AT を取得したと言っても就職先が増えるわけではない（23 歳男性）

2) トレーナー活動を開始し 5 年以上 10 年未満の時期

「テクニカル・スキル要素の達成とリーダーシップを高める時期」

この時期は、学生やアシスタントの研修時代を終えてから数年の社会経験を積んだ 20 才代後半から 30 才代前半の年代が多く該当する。先の 5 年以内の活動時期の者から見れば「近い将来を想像できるトレーナー」である。この時期は、応用的なトレーナー技術や専門知識の習得を進めることが優先されている(図 12)。トレーナーも年代が上がるにつれて、基礎的な分野に続いて、応

用的な能力を身につけていく事の必要性が示された。JASA-AT の主な職業でも「プロ・実業団」で活動に従事している者がおり、JASA-AT に期待されているトップレベル競技のトレーナー活動が現実的に行える年代である。さらに、この年代は社会的にも指導的な立場に立つ事が求められ始める頃であり「他人に働きかけ、巻き込む力を高める」こと、「選手への指導能力を高める」といったリーダーシップに重きをおいた指導力の向上が必要とされている。この事は、この後に続くトレーナー活動を開始して 10 年以上の年代に求められる「雇用する側」への社会的立場の移行を下支えする経験値として身につけるべき要素でもある。これらの事からトレーナーは、活動を開始して 10 年までの時期に、トレーナーとしての「テクニカル・スキル要素」については「独り立ちできる程度の水準」まで習得すべきである。

3) トレーナー活動を開始し 10 年以上 15 年未満の時期

「雇用」「教育」「研究」について責任を持ち始める時期

トレーナーも年齢を重ねて「雇用される側」から「雇用する側」へと社会的な立場を移行させる時期である。この時期から「コンセプチュアル・スキル要素」を優先して身につけることが示されはじめている（図 13）。この時期の多くは、30 才代後半から 40 才代前半の者が該当している。この年代は、トレーナーの経験値とともに、社会からも一定の信用が構築された時期であり、質問紙の結果からは「起業、独立のための準備」「雇用を創出する取り組み」「地域社会へのトレーナー理解を提案する」といったトレーナーの雇用創出につながる能力要素が示された。実際に JASA-AT らの主な職業としても、先の二つの若い年代には見られなかった「経営者」として働き方を選択しているトレーナーも出てきている。

また、この年代から大学・専門学校などの教育機関に就業しているトレーナーの数も増えている。先の二つの若い年代で培ったトレーナーのテクニカル・スキル要素を基に、次世代のトレーナーを教育・養成する役割が求められ始める年代である。加えて、トレーナーの活動を学術的な視点から評価するための研究活動や論文の発表も数多く担う年代でもある。トレーナー活動の土台は、多くの経験値が集合した知識の総合力であると同時に、しかるべき理論背景に裏づけされた「根拠に基づいた医療」evidence-based medicine（EBM）としての側面も併せ持つ事が不可欠である。このため、スポーツ現場での活動と同時に、自らの活動を下支えするための最新の研究活動も両立させながら社会に貢献すべき年代と言える。

さらに、映像活用能力（映像の加工、編集できる技術）を身につけるべきという結果が多い背景には、近年の IT 技術の発展に伴うトレーニング科学、スポーツ医学の急速な IT 活用化の影響が大きい。IT 化の発展は、1995 年ごろからの 20 年近くで急速に進み、スポーツ現場でも実践的な活用が進められてきた。トレーナーとしての経験値が高まり、10 年以上の実績が積み重ねられた時期に、自らの経験値を「教育」や「研究」の場に生かすための手段として画像や動画機能を中心とした IT 技術の活用能力が有効に働くことが予想される。テクニカル・スキルの中でも、トレーナーの専門的な能力を側面的に補完するもう一つの重要な技術要素として改めて身につけるべき能力の一つに挙げられた事が推測できる。

4) トレーナー活動を開始して 15 年以上の時期

トレーナー業界を「舵取り」する時期

20 才代前半でトレーナーの活動を開始した者も、その多くは 40 才代後半、50 才以

上になる年代である。この年代のトレーナーはJASA-AT資格制度が整備される以前からトレーナー活動をしている者も多い。また、JASA-AT資格制度の成り立ちと変遷にも関わりながらトレーナー業界に貢献してきた年代でもある。その過程において、医療系資格が必要であったこともあり、主な職業を見ると、医療機関で働く者や、教育機関に所属するものが多い。この年代は、トレーナー自身が、新たな専門的知識や技術を身につけることよりも「コンセプチュアル・スキル要素」を重視した能力要素を高めることが優先されている(図14)。特に、トレーナーを取り巻く社会や関連団体への働きかけと、トレーナー自身のあり方、組織のあり方を問うような制度の設計に働きかける事が求められている。

さらに、回答では「国、行政機関へのトレーナー理解を提案する」「リスク管理、コンプライアンス（法令順守）への配慮を増やす」といったトレーナーと社会との距離を単に、個人の信頼関係だけで取り持つのではなく、しかるべき補償制度の整備とともに発展させていくことを強調して指摘している点もこの年代の特徴だと言える(表3)。若い世代では担うことの難しい、包括的な視点や俯瞰しながらトレーナー活動のできる能力が重要視され、業界の「舵取り」ともいうべき制度設計や組織の構造改革、雇用や人材育成の総括に働きかける活動に積極的な取り組みを期待する年代である。

Ⅶ. 提　言

本研究では、マスタープランの中で示されたJASA-ATの現状から一歩踏み込んで、社会に認知される上で必要とされるいくつかの能力要素についても確認した。本研究の結果を受けて、トレーナーという職業が、単に専門的な知識と技術を高め、対象者に提供するだけの能力では足りないことが示された。さらに、JASA-ATとして他の医療系資格との差別化を図るためには、トレーナーとしての強みである「トレーニング」「パフォーマンス向上」を具現化できる能力を存分に発揮し、職業への発展を求めるのであれば、より「商品化」「サービス化」へと形を整えていくことも行われなければならない。いずれにしても、トレーナーが提供する様々な情報は、「根拠に基づいた医療」（EBM）とともに提供されるべきである。トレーナー自身も感覚と、経験値だけに頼った活動ではなく、理論背景を十分に考慮したトレーナー活動を行うことが、保障制度が未熟なトレーナー業界で、自身を守ると同時に業界の発展に寄与するものになると期待されている。トレーナーが自らを取り巻く社会に広く認知され、多くの人々の健康に寄与し、トレーナー業界自体の発展を進めていくのであれば、トレーナー同士が、各年代で果たすべき役割を認識し、同じ発想のもとに継続的に協力し合える関係性を深めていくことが重要である。これは、トレーナーとしての専門的な知識・技術の枠を越えて、社会人としての前に踏み出す力や、チームで働く力、考え抜く力を同時に高めながら、課題に取り組む姿勢を同じ意識レベルでもつことである。時代の変遷と共に、制度や組織のあり方が変わるのと併行して、トレーナーひとりひとりが明確なビジョンを持ち、社会が求めるニーズに柔軟に対応できるスポーツ(トレーニング)の専門家であるべきだと結論づける。

Ⅷ. 引用・参考文献

1)馬場宏輝(2011)「我が国におけるアスレティックトレーナーの制度化に関する研究」仙台大学紀要 Vol.42,No.2,pp.69-77
2)馬場宏輝・石山信男（2007)「日本におけるAT界の発展に関する提案～特に資格認定団体と業界団体の区別を意識して」

仙台大学紀要 Vol.39,No.1,pp.44-58
3)経済産業省(2014)社会人基礎力：育成の手引き「日本の将来を託す若者を育てるために.教育の実践現場から」
4)経済産業省(2014)社会人基礎力.「社会人基礎力とは http://www.meti.go.jp/ policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf（参照日 2014 年 12 月 13 日）
5)公益財団法人日本体育協会(2007)「公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト 1：アスレティックトレーナーの役割」pp.1-40
6)日本体育協会公認アスレティックトレーナー連絡会議（2010）.「財団法人日本体育協会 JASA-AT マスタープラン」
7) RobertL.katz(1974)「Skills of Effective Administrator」 https://hbr.org/1974/09/skills-of-an-effective-administrator(参照日 2014 年 12 月 13 日）